

合が低下する半面、就業年齢層の割合が増加することになる。この国の人口は1908年には100万であったのが1953年には200万と倍増したが、この人口増加率のままでは、今後20年経たないうちに人口は300万人に達するものと考えられる。現在の生活水準の維持と完全雇用の観点からみて、この国の人口増加は将来大きな問題になると思われるので、ここでは特に人口とそれに関連して起る問題について、調べてみた。

ニュージーランドの人口は、年々2%以上増加しており、1957年には300万人に達するといわれるが、現在の生活水準を引き下げないでこの増加人口を養うためには、第一次産業および第二次産業の生産をどの程度引き上げ増加する労働力をどこで吸収するかが問題になる。これを第一次産業についてみると、1975年における300万の人口に対して現在の生活水準を維持するためには、バターおよび、食肉をそれぞれ60%、羊毛を70%増加しなければならないが、その目標を実現するためには1950年における生産水準の2%を年々増加しなければならないことになるが、これは非常に困難である。また労働人口の増加は農業において吸収する余地はなく、結局第二次産業で吸収する他ないが、第二次産業の拡大は必然的に原材料・設備などの輸入の激増となってこの国の外貨事情を悪化させることになり、他面市場が狭隘なことから賃金コストの高いために、この国の工業を海外の工業製品の競争から守るためには、政府の統制による輸入制限、関税障壁による方法しか残されていない。

日野市の地理学的考察

松橋葉子

第一章 地域概説

第一節 自然環境

日野市は東京の西南部にあたる。ここで多摩川とその支流の浅川が合流している。地形は丘陵・台地・段丘・沖積地に分類され、そのうち丘陵・台地・段丘の上位2段は一次ロームにおおわれている。

気候はだいたい表日本式気候と同じ *type* であるが、都心と較べると、やや内陸的傾向が気温の上でみられ、また山地に近づくため、雨量も多くなっている。

第二節 人文環境

ここでは後述の都市化の章で扱った以外のことをとり上げた。日野は江戸時代、甲州街道の一宿駅であった。明治以後の鉄道の開通、昭和初期の工場

の進出、最近の住宅の増加により、今日見るまでに発展してきた。

工業は重化学工業、精密機械工業がほとんどである。また、農業は全般的に後退している。台地・段丘の上位3段までは畑・桑畑が多く、それ以下の所では稲作が行われている。稲作はへったとはいえ、まだ都下の生産量をしめしている。

いろいろな面で結びつきが最も強いのは東京都中心部、それについて横浜となっており、隣接する諸市との間にはあまり相互の結びつきは見られない。

第二章 地形面の詳説

地形区分とその分類基準は次の通りである。

- | | | | |
|---------|---|-----------------------|-----------|
| I. 丘陵 | { | a. 高位面 | 高度・開析度 |
| | | b. 低位面 | |
| II. 台地 | { | a. 高位面 | 高度・ロームの厚さ |
| | | b. 低位面 | |
| III. 段丘 | { | a. 第1段丘面 | 高度・比高 |
| | | b. 第2段丘面 | |
| | | c. 第3段丘面 | |
| | | d. 第4段丘面 | |
| IV. 沖積地 | { | a. 高位面 | 比高・土壌 |
| | | b. 低位面 | |
| | | c. 自然堤防 | |
| V. 谷底平野 | { | a. 日野台地上の谷底平野 | |
| | | b. 谷地川の谷底平野 | |
| | | c. 多摩丘陵から流れ出る小河川の谷底平野 | |

第三章 都市化

全般を通じて、日野の都市化の過程は2段階にわけられる。始めは昭和10年ごろから、次は昭和31年ごろからである。農業の衰退・工業化・住宅地化・人口増加と人口構成の変化等の過程にもこの2段階があらわれている。

昭和10年前後に、それまで純農村であった日野市に軍需工業を中心とするいくつかの工場が立地した。住宅としては各工場の社宅、寮がたった。このための明治の初期からほとんど自立つような変化のなかった人口は昭和10年を境に増加し始めた。

昭和31年をこえると、工場の進出が再び活発になると同時に、東京都のいわゆるベッド・タウンとして、大規模な団地が造成された。それに伴って人口増加率はさらに高くなってきた。

台地・段丘の上位3段までは畑作，低地では稲作が行われているが，すでに後退しつつあり，農家の家計の中心は農業以外のものに移っていく傾向が強くなっている。

鳥海山北西麓の地理学考察

与謝野たづ

きさかたの桜は波に埋もれて花の上こぐ海士のつり舟 西行
世の中はかくても騒りききさかたの海士の苦やを哀宿にして 能因法師
きさかたや雨に西施がねむの花 芭蕉

私は一番初めにきさかたのみを卒論のフィールドにしようと思い立った。子供の頃からこの地には遠足で何度も来たことがあるし，先生のお話によると何でも地形的に面白い所らしい。それにこの地が隆起する前の風光は大変明媚なところであったようで，西行とか芭蕉とか有名な人々が来てなんとなくいい歌や俳句を残していった。地震の為に海が陸になってしまったということやその前は八十八潟九十九島があったということ等々，夢がいっぱいあるような気がした。しかしながら卒論のフィールドは5万分の1の地区のみの範囲にわたるものでなくてはならないので，きさかたは卒論フィールドの一部になってしまった。

鳥海山北西麓はきさかたを含むところの泥流地形，火山の二次堆積物による火山山麓扇状地及び鳥海山から流れてくる白雪川の作った平地，断層地形，砂丘など多様な地形の分布する地域である。ここの地形は大体次のように区分される。(1) 奈萱川扇状地 (2) 本郷凹地，(3) 白雪川上位扇状地，(4) 白雪川下位扇状地，(5) 白雪川三角州世低地 (6) 仁賀保丘陵 (7) 泥流丘密集低地 (8) 海岸低地。

鳥海山は第三紀層を基盤とする2320mの火山である。従って当地域には第三紀層の露頭が随所にみられる。当地域の主な土地利用は山林と採草地と水田であり，山林と採草地は山地及び石の多い扇状地なので到底水田化できないところに分布する。よって土地利用を考察する点では水田だけを考えればよいことになってしまった。水田をどのような角度からみればよいかがということが悩みの種となったが，この地域が火山山麓であるにもかかわらず近隣の庄内平野に較べ，開発が早いことに注目し，その理由を地形及び気象の特質に求めた。それはかんがい水をひきやすい地形，ため池を作りやすい地形，泥流丘からの蘗植や泥と火山灰より土壌がなり比較的耕作しやすい土壌